

説明文における中国人日本語学習者の序列の接続表現の選択  
—日本語母語話者との比較を通じて—

黄 明侠

## 要旨

本稿では、手順を説明する説明文を書くとき、日本語母語話者と中国語を母語とする日本語学習者の作文に出てきた序列の接続表現の使用傾向について考察した。

調査の結果、調理の手順の最初の段階と最後の段階を説明する場合は、日本語母語話者と中国語を母語とする日本語学習者の作文に現われる接続表現は比較的似た傾向があり、「まず」と「最後に」が最も多く使用されていた。しかし、調理の途中の段階を説明する場合、日本語母語話者は「次に」、中国語を母語とする日本語学習者は「それから」を最も多く使用し、それぞれ選択した接続表現は全く違うという傾向が見られた。

また、同じテーマについて中国語で書いた作文との比較分析を通して、中国語を母語とする日本語学習者の日本語作文に出てきた接続表現の選択の特徴は、学習者の母語である中国語と密接な関係があることが示唆された。

キーワード：中国語母語話者、日本語母語話者、説明文、序列の接続表現、母語の転移

## 1. はじめに

作文やレポートなどを書くとき、複雑な内容を読み手にわかりやすく伝えるために、書き手は自分の頭の中でその内容を整理し、整理した内容をどのようにまとめれば読み手にとって理解しやすいかを工夫しなければならない。その際、「まず」、「次に」や「はじめに」「続いて」などのような序列の接続表現がよく用いられる。

これらの接続表現は一見簡単そうに見えるが、日本語学習者が実際に作文を書くとき、これらの序列の接続表現の使い方に関してうまく行かないケースが多い。そこで、本稿では、何かについて説明するとき、日本語母語話者と日本学習者がどのような序列の接続表現を使用しているのかについて考察し、日本語母語話者と日本語学習者の序列の接続表現の選択に、それぞれどのような特徴を持っているのかについても明らかにしたい。

## 2. 先行研究

森重（1959）では、「まず・はじめに・つぎに・最後に…」などは「並列副詞」として取り上げ、「文乃至文以上の連文を並立の対象・要素・項として、段落的に序列づけるもの」とし、こうした副詞の連文的機能についてかなり早い時期に指摘を行っている。一方、小林（1987）では、「最初に」、「はじめに」、「次に」などに関して、「品詞論的には副詞の用法で使われるものを序列副詞と称する。」とし、序列副詞の連文的機能について初めて本格

的に論じている。これらの表現が品詞論上は副詞であることに筆者自身も同意するが、本稿では、文同士を接続する表現を広く扱うため、また、文同士の接続関係に焦点を当てるために、序列の接続表現という名称を採用する。

本稿の序列の接続表現というとらえ方と同様のとらえ方をする代表的研究に、市川(1978)と日本語記述文法研究会(2009)がある。市川(1978)では、本稿でいう序列の接続表現について、接続語句という接続詞相当の機能を持つものと見なしており、文と文の論理関係によって、接続語句を「論理的結合関係」「多角的連続関係」「拡充的合成関係」の三つのグループに大きく分け、グループごとに、さらに八つの類型に再分類している。本稿で取り上げる序列の接続表現は、市川(1978)の分類の中では「多角的連続関係」の「添加型」に属し、「前文の内容に付け加える内容を後文に述べる型」と定義されている。

また、日本語記述文法研究会(2009)では、本稿で扱う接続表現を「列挙の接続表現」と呼び、「1つの大話題の中で用いられ、後続部で小話題が順に提示されることを示す。」と定義している。つまり、通常の接続表現は、先行部の内容を直接受けて、先行部と後続部との関係を示すのが普通であるのに対し、列挙の接続表現は先行部と後続部の関係を直接示すわけではなく、列挙される項目をくくる大枠を示す先行部を踏まえ、その大枠に該当する項目の前後関係をあたかも番号を振るように示すものであることを、明確に指摘した点に特徴がある。

一方、序列の接続表現の内部構造を詳細に論じたものに木戸(1999、2001、2002)と石黒(2005)がある。また、序列の接続表現を本格的に取り上げた研究は、管見では、木戸(1999、2001、2002)が最初である。木戸(1999、2001、2002)では、留学生と日本人学生に行った接続表現想定調査と作文調査を通して、理解の面と表現の面から文章構造のとらえ方を分析・考察し、列挙の文章構造の多様性について論じている。

さらに、石黒(2005)は、序列の接続表現について、組み合わせのタイプから「順序を問わない接続語」「順序を問う接続語」「順序を問える接続語」の三つに分け、次の表1のようにまとめている(表自体のまとめは筆者による)。

表1 序列接続表現のタイプと特徴

組み合わせのタイプ	意味用法	特徴	具体例
順序を問わない接続語	列挙されている事柄の順序を入れ替えてもその論理的意味が変わらないときにのみ使われる	文章のなかの箇条書き	「第一に」「第二に」「第三に」「また」など
順序を問う接続語	順序を入れ替えるとその論理的意味が変わってしまうときにのみ使われる	順序を重視した列挙	「最初に」「はじめに」「続いて」「次いで」「その後」など
順序を問える接続語	いずれでも使うことができる	箇条書き、順序いずれも可	「まず」「次に」「さらに」「最後に」「そして」など

これらの先行研究によって、序列の接続表現の定義や特徴、役割などが明らかになったと考えられる。しかし、日本語学習者が実際に文章を書くときに、どのような序列の接続表現を使用しているのか、また、日本語母語話者との比較を通じて、学習者の接続表現の特徴や、母語の影響などに関する研究はこれまでなかった。

そこで、本稿では、日本語母語話者（以下「日本語母語話者」とする）と中国語を母語とする日本語学習者（以下「中国語母語話者」とする）の作文の中に出てきた接続表現の使用上の特徴を明らかにし、日本語母語話者と中国語母語話者の接続表現の違いがどこにあるか、また、中国語母語話者の母語である中国語がそれにどのような影響を与えているのかについても明らかにしたい。

### 3. 研究方法と資料

#### 3.1 調査目的

手順を表す説明文を書くとき、日本語母語話者と中国語母語話者が実際にどのような接続表現を使用しているのか、それぞれどのような類似点と相違点があるのかについて分析・考察を行う。

#### 3.2 調査対象者

今回は日本語母語話者と中国語母語話者、それぞれ 70 名に調査対象者として作文調査を行った。日本語母語話者は日本国内の大学で文系学部にも所属する学部生であり、中国語母語話者は中国国内の大学で日本語を専攻する学部生である。

中国語母語話者については、北京市にある A 大学、北京市にある B 大学と、哈爾濱市にある C 大学、三つの大学で調査を実施した。実施時期はそれぞれ 2010 年 3 月、2011 年 1 月と 3 月である。A 大学で 21 名（2 年生 9 名、3 年生 3 名、4 年生 5 名、大学院生 4 名）、B 大学で 18 名（2 年生 18 名）、C 大学で 35 名（3 年生 35 名）、合計 74 名の中国語母語話者のデータを入手した。本稿では主に日本語を専攻する学部生を中心に分析を行うため、4 名の大学院生を除き、70 名の学部生のデータを取り上げた。なお、今回の調査では、中国語母語話者の学習歴を確認し、旧日本語能力試験で 2 級の目安とされている学習時間 600 時間以上の授業時間を経ている学習者のみを対象としている。

表 2 作文調査対象者

日本語母語話者		中国語母語話者	
日本国内の学部 2 年生	17 名	中国国内の学部 2 年生	27 名
日本国内の学部 3 年生	41 名	中国国内の学部 3 年生	38 名
日本国内の学部 4 年生	12 名	中国国内の学部 4 年生	5 名
合計	70 名	合計	70 名

一方、日本語母語話者については、東京都内にある D 大学で調査を実施し、実施時期は 2009 年 1 月である。学部 2 年生、3 年生、4 年生合計 74 名の日本語母語話者のデータを入手したが、中国語母語話者の調査対象者の人数に合わせるために、ランダムに 70 名の日本語母語話者のデータを取り出した。その内訳は前ページの表 2 の通りである。

### 3.3 調査方法

調査方法としては、「料理の作り方」という同一のテーマについて、日本語母語話者には日本語で、中国語母語話者には日本語と中国語で作文を書いてもらうという指示を出した。なお、中国語と日本語、どちらを先に書くかについては、特に指示はせず、中国語母語話者それぞれの判断に委ねた。

今回の調査資料の具体的な内容は以下の通りである。

あなたの得意料理、または、得意とは言えなくても作ることができる料理の作り方を書いてください。

注意点：

- ア) 料理をまったく作らない人はおいしいコーヒーの入れ方などでも大丈夫です。
- イ) その料理を作ったことがない人が作ってみたくるように、また確実に作れるように書いてください。
- ウ) 600 字以内で書いてください。段落を分ける場合、改行+1 字下げではなく、▼で表記してください。
- エ) 日本語と中国語、両方書いてください。(中国語母語話者のみ)
- オ) ①、②、③などのような箇条書きを使わないでください。文章で書いてください。

## 4. 調査結果と分析

本稿では、調理の「最初の段階」、「途中の段階」、「最後の段階」という三段階に分けて見ていきたい。なお、本稿で取り上げた序列の接続表現は、調理の手順の段階を表す表現で、文頭にある序列副詞あるいは接続詞が対象となる。ただし、「さて、次に」の「次に」のように接続表現の二重使用で文頭のないものや、文レベルではなく節レベルで用いられているものでも、前後の関係から調理の手順の一部をなすことが明らかな場合は取り上げることにした。一方、序列の接続表現であっても、調理の手順の段階を示さない列挙、たとえば、調理の準備段階など、調理の手順自体とは関わらない局所的なものは除いて考えてある。

### 4.1 最初の段階について

日本語母語話者と中国語母語話者の作文の中に現われた接続表現は、次ページの表 3 のようにまとめられる。

本稿では、接続表現を「基本形式」と「バリエーション」という2段階に分けて取り上げることにする。ここで「基本形式」というのはいくつかのバリエーションの中で最も多く使用され、代表的なものである。「バリエーション」の中で「一」という表記は基本形式以外の形では使用されていないという意味である。また、バリエーションを有する基本形式を「〇〇類」と称する。たとえば、表3の中の「まず」「まずは」という2種類のバリエーションを持つ基本形式「まず」を「まず」類と呼ぶ。

表3 最初の段階に関して日本語母語話者と中国語母語話者の使用実態

接続表現		日本語母語話者使用者数	中国語母語話者使用者数
基本形式	バリエーション	(割合)	(割合)
「まず」	まず	41 (58.6%)	51 (72.9%)
	まずは	10 (14.3%)	3 (4.3%)
二重使用	まずはじめに	3 (4.3%)	—
	まず最初に	1 (1.4%)	—
「最初に」	—	3 (4.3%)	1 (1.4%)
「はじめに」	—	2 (2.9%)	—
「第一に」	—	1 (1.4%)	—
「第一歩」	—	—	2 (2.9%)
取り敢えず	—	—	1 (1.4%)
なし	—	9 (12.9%)	12 (17.1%)

表3から分かるように、調理の最初の段階の説明では、日本語母語話者と中国語母語話者共に「まず」類を最も多く使用した。そして、それぞれの使用者数は日本語母語話者が70名のうち51名、中国語母語話者が70名のうち54名であり、さほど大きな差が出なかった。

しかし、「まず」類のバリエーションを比較してみると、日本語母語話者と中国語母語話者の使用者数には違う傾向が見られた。日本語母語話者の場合は、「まず」の単独使用だけではなく、「まずは」を使用した者(10名)も少なくなかった。それに対して、中国語母語話者の場合は、「まず」の単独使用が圧倒的に多かったが、「まずは」を使用した者は日本語母語話者の使用者数の3分の1である3名であった。

最初の段階を説明するときに、中国語母語話者が中国語で書いた作文の中に現われてきた接続表現は表4のようになる。

表4 最初の段階に関して中国語作文における中国語母語話者の使用実態

接続表現	使用者数 (割合)
首先	49 (70.0%)
先	6 (8.6%)
第一歩	3 (4.3%)
開始	1 (1.4%)
なし	11 (15.7%)

表4を見ると、中国語作文では、他の接続表現より「首先」の使用者数が最も多く、70名のうち49名(70%)であった。そして、「先」も数名の中国語母語話者に使用されている。

多くの日中辞典において、「まず」に対応する中国語は「首先」である。同じ中国語母語話者が日本語と中国語で書いた作文の中に出てきた「まず」と「首先」の対応関係を見ると、「まず」類を使用した54名の中国語母語話者のうち、対応する接続表現がないという2名を除き、48名が中国語作文で「首先」を使用し、4名が「先」を使用した。そして、「首先」を使用した49名の中国語母語話者のうち、1名を除き、48名が日本語作文では「まず」類を使用した。日本語作文に出てきた「まず」類と中国語作文に出てきた「首先」の間に相当高い対応関係があることがうかがわれる。

また、前ページの表3を見ると、「まず」類だけではなく、接続表現の二重使用や、「最初に」、「はじめに」なども数名の日本語母語話者に使用されている。「まず」、「最初に」と「はじめに」の意味違いに関して、飛田・浅田(1994)では、『「まず」』は全体の仕組みを頭において最も優先させるべきものを選択している主体の意図の暗示がある。『さいしょに』、『はじめに』は物事の開始部分に何かが行われる様子を表し、優先させる意図には言及しない。」と述べている。そして、74ページの表1では、時間的な順序性がある列挙の接続表現として、「最初に」、「はじめに」が取り上げられている。そのため、ここで調理の手順を説明するとき、「最初に」や「はじめに」を使用することが可能であると考えられる。

しかし、中国語母語話者は「まず」類以外に、接続表現の二重使用や、「最初に」と「はじめに」を使用した者がほとんどいない。『新編日語』(1993)では、『「はじめ」』は『開頭；開始』、『最初に』は『起初；開始』と翻訳されている。前ページの表4を見ると、中国語母語話者が中国語で書いた作文の中にも「開始」や「起初」などはあまり現われてきていない。中国語で時間的な前後関係を説明するとき、その開始の部分について叙述するとき、「開始」、「起初」より「首先」のほうが自然であると感じられ、多くの中国語母語話者に用いられている。したがって、ここで中国語母語話者が「最初に」や「はじめに」より「首先」に対応する「まず」類を多く使用したのは、母語の影響があるのではないかと思われる。

#### 4.2 途中の段階について

調理の途中段階を説明するとき、日本語母語話者と中国語母語話者の作文の中に出てきた接続表現は、次ページの表5のようになる。

ここでいう「異なり数」というのは、全調査対象者のうち、何名が当該接続表現を使用しているかという意味を表す。そして、「延べ数」というのは、全調査対象者の作文の中で、繰り返しの使用を含め、当該接続表現は全部で何回出現しているかという意味を表す。一つの作文の中で、何種類かの接続表現については、繰り返しの使用があったため、接続表現の使用者数を合わせると調査対象者の70名を超えるという現象も見られた。

表5を見ると、調理の途中の段階を説明するとき、日本語母語話者と中国語母語話者が最も多く使用した接続表現は全く異なることが分かった。日本語母語話者は「次」類が最も多く使用され、中国語母語話者は「それから」が最も多く使用された。そして、それぞれの使用者数はほぼ同じであり、日本語母語話者は70名のうち38名(54.3%)であり、中国語母語話者は、70名のうち39名(55.7%)であった。一方、日本語母語話者に多く使用された「次」類に関して、それを使用した中国語母語話者も少なくなく、16名であった。しかし、中国語母語話者に多く使用された「それから」に関して、それを使用した日本語母語話者は非常に少なく、僅か1名であった。

表5 途中の段階に関して日本語母語話者と中国語母語話者の使用実態

接続表現		日本語母語話者		中国語母語話者	
基本形式	バリエーション	異なり(割合)	延べ(出現回数)	異なり(割合)	延べ(出現回数)
「次に」	次に	36 (51.4%)	37	10 (14.3%)	10
	次は	2 (2.9%)	2	4 (5.7%)	5
	次	—	—	2 (2.9%)	2
「そして」	—	16 (22.9%)	20	25 (35.7%)	28
「さらに」	—	6 (8.6%)	6	2 (2.9%)	2
「あとは」	あとは	5 (7.1%)	5	4 (5.7%)	5
	あと	—	—	1 (1.4%)	1
「その後」	その後	1 (1.4%)	1	10 (14.3%)	11
	その後で	—	—	1 (1.4%)	1
「続いて」	続いて	1 (1.4%)	1	2 (2.9%)	2
	続いては	—	—	1 (1.4%)	1
	続けて	—	—	1 (1.4%)	2
「それから」	それから	1 (1.4%)	1	38 (54.3%)	43
	それからは	—	—	1 (1.4%)	1
「第二に」	—	1 (1.4%)	1	—	—
「また」	また	—	—	5 (7.1%)	5
	または	—	—	1 (1.4%)	1
「それで」	—	—	—	4 (5.7%)	4
「第○歩」	第二步	—	—	1 (1.4%)	1
	第三步	—	—	1 (1.4%)	1
	第四步	—	—	1 (1.4%)	1
「次いで」	—	—	—	1 (1.4%)	1
なし	—	22 (31.4%)	22	5 (7.1%)	5

「次」類と「それから」類に次いで、多くの日本語母語話者と中国語母語話者に使用されたのは「そして」である。それぞれの使用者数は16名(22.9%)と25名(35.7%)であった。また、中国語母語話者に多く使用されたもう一つの接続表現は「その後」である。70名の中国語母語話者のうち10名(14.3%)が「その後」類を使用したのに対して、日本語母語話者がそれを使用した者は僅か1名であった。

途中の段階を説明するとき、中国語母語話者が中国語で書いた作文の中に現われてきた接続表現は表6のようになる。

表6 途中の段階に関して中国語作文における中国語母語話者の使用実態

接続表現	異なり (割合)	延べ (出現回数)
然后	48 (68.6%)	59
之后	11 (15.7%)	12
接着	8 (11.4%)	9
其次	8 (11.4%)	8
接下来	6 (8.6%)	7
再	5 (7.1%)	7
随后	2 (2.9%)	2
第○步	1 (1.4%)	3
还有	1 (1.4%)	1
而且	1 (1.4%)	1
接下去	1 (1.4%)	1
并	1 (1.4%)	1
なし	8 (11.4%)	8

表6を見ると、他の接続表現より「然后」の使用者数が圧倒的に多く、70名のうち48名であり、約70%の中国語母語話者が「然后」を使用している。そして、「然后」の「延べ数」は59回であるというのは、「然后」は頻繁に中国語母語話者に繰り返し使用されていることが分かった。また、「之后」、「接着」、「其次」なども10%以上の中国語母語話者に使用されている。

多くの日中辞書では、「それから」と「そして」に対応する中国語は「然后」とされている。同じ中国語母語話者が日本語と中国語で書いた作文に出てきた「それから」、「そして」と「然后」の対応関係を見ると、日本語作文で43回が出現した「それから」のうち23回、28回が出現した「そして」のうち10回が中国語作文で「然后」が使用されていた。また、「次」類に対応する中国語は「其次」であるにもかかわらず、日本語作文で17回出現した「次」類のうち、中国語作文で「其次」を使用した回数は僅か3回であり、8回が中国語作文で「然后」を使用していた。

一方、中国語作文の側から日本語作文を見ると、59回も出現した「然后」は、23回の「それから」は、10回の「そして」、8回「次」類を除くと、「その後」は3回、「また」は2回、「更に」は1回、対応する接続表現がないのは12回のようになっていた。この考察から、中国語の「然后」に対応する日本語のバリエーションが様々であるということがうかがえる。

「次に」、「それから」、「その後」の意味用法に関して、飛田・浅田(1994)では表7のようになる。なお、ひけ(1996)では、『それから』は時間的な先行・後続の関係(ある



いは継起的な関係)のなかにある、ふたつの、ことなる動作(出来事)をむすびつけるの  
 にたいして、『そして』は、同時的な関係のなかにある、ふたつの動作をひとまとまりの複  
 合動作にまとめる。」と述べられている。

表7 「次に」「それから」「その後」の意味用法

接続表現	意味用法
つぎに	前の事柄に一区切りをつけて新しい事柄を提示する様子を表す。
それから	時間的に後であるというよりは、順序が後であることのほうに視点のある表現である。前件に引き続き一連の行動を起こす様子を表し、前と後の行動に関連性のあることが暗示される。
そのあと	順序が後であることを強調するニュアンスで、前後の事柄の関連性には言及しない。

したがって、ここで日本語母語話者が「次に」を多く使用したのは、調理の手順として最初の段階を一段落させて、新しい段階に移るという予告をしたいからではないかと考えられる。また、「そして」が多くの日本語母語話者に使用されたのに対して、「それから」を使用した日本語母語話者がほとんどいなかったのは、調理の手順を説明するとき、前後の関係が一連のものとして連続性が強調される「それから」では、今どの調理のどの段階に取り組んでいるかが分かりにくいことが背景にあると予想される。

一方、中国語母語話者がこの段階で「それから」と「そして」を多く使用したのは、「それから」と「そして」は日本語学習初級の段階で教えられ、最も馴染みやすく、使いやすい接続表現であり、そして、中国語で料理の作り方を説明するときのつながり言葉として、「然后」が最も自然であるため、「然后」と関連して想起されやすい「それから」と「そして」が多く使われたことが示唆される。

#### 4.3 最後の段階について

調理の最後の段階を説明するとき、日本語母語話者と中国語母語話者の作文の中に現われてきた接続表現は次ページの表8のようになる。最後の段階の説明に、数名の調査対象者が2種類以上の接続表現を使用したため、接続表現の使用者数を合わせると調査対象者の70名を超えるという現象があった。

表8を見ると、日本語母語話者と中国語母語話者は共に「最後」類を多く使用しており、中国語母語話者の使用者数(34名)が日本語母語話者の使用者数(16名)の2倍もあることが分かった。また、「最後」類のバリエーションを詳しく見ると、日本語母語話者の場合は、3つのバリエーションの中で「最後に」の使用者数が圧倒的に多かった。それに対して、中国語母語話者の場合は、「最後に」の使用者数が多かった一方、「最後」、つまり、格助詞「に」、「の」などをつけず、そのまま使用する中国語母語話者の数も少なくなかった。

「最後」類のほかに、12名の日本語母語話者は「あとは」を使用した。しかし、ここで「あとは」を使用した中国語母語話者は一人もいなかった。また、最後の段階を説明するとき、

接続表現を全く使用しなかった日本語母語話者と中国語母語話者の数も非常に多かった。日本語母語話者の場合は、接続表現を全く使用しなかった者の数は「最後」類を使用した者の数の2倍以上もあり、中国語母語話者の場合は、接続表現を全く使用しなかった者の数は「最後」類を使用した者の数に近い値であった。

表8 最後の段階に関して日本語母語話者と中国語母語話者の使用実態

接続表現		日本語母語話者使用者数	中国語母語話者使用者数
基本形式	バリエーション	(割合)	(割合)
「最後に」	最後に	15 (21.4%)	17 (24.3%)
	最後は	1 (1.4%)	5 (7.1%)
	最後	—	12 (17.1%)
「あとには」	あとには	12 (17.1%)	—
	あと	1 (1.4%)	—
二重使用	そして最後に	3 (4.3%)	—
「そして」	—	2 (2.9%)	4 (5.7%)
「その後」	—	2 (2.9%)	1 (1.4%)
「それから」	—	1 (1.4%)	3 (4.3%)
「また」	—	1 (1.4%)	—
「それで」	—	—	1 (1.4%)
「第五歩」	—	—	1 (1.4%)
「次に」	—	—	1 (1.4%)
「続いて」	—	—	1 (1.4%)
なし	—	34 (48.6%)	29 (41.4%)

最後の段階に関して、中国語母語話者が中国語で書いた作文の中に現われてきた接続表現は表9のようになる。表9から分かるように、中国語作文では約過半数の中国語母語話者が「最后」を使用している。また、「最后」以外に他の接続表現を使用した者はほとんどおらず、過半数の者がこの段階で接続表現を全く使用しなかった現象も見られた。

表9 最後の段階に関して中国語作文における中国語母語話者の使用実態

接続表現	使用者数 (割合)
最后	33 (47.1%)
然后	3 (4.3%)
接着	1 (1.4%)
第五歩	1 (1.4%)
なし	35 (50.0%)

「最後」類に対応する中国語は文字通り「最后」である。同一の中国語母語話者が日本語作文と中国語作文に出てきた「最後」類と「最后」の対応関係を見てみると、日本語作文で「最後」類を使用した34名の中国語母語話者のうち、何の接続表現にも対応しない4名を除き、30名が中国語作文では「最后」を使用している。また、中国語作文で「最后」

を使用した 33 名の中国語母語話者のうち、3 名を除き、30 名が日本語作文では「最後」類を使用している。したがって、中国語母語話者が日本語作文で書いた作文の中に「最後」の単独使用現象が多く現われてきたのは、中国語の「最后」をそのまま翻訳して、使用されたのではないかと考えられる。

## 5. 終わりに

本稿では、手順を説明する説明文を書くとき、日本語母語話者と中国語を母語とする日本語学習者の作文に出てきた序列の接続表現の使用傾向について考察した。

調査の結果、調理の手順の最初の段階と最後の段階を説明するとき、日本語母語話者と中国語を母語とする日本語学習者の作文に現われてきた接続表現は似たような傾向であり、「まず」と「最後に」が最も多く使用された。しかし一方、調理の途中の段階を説明するとき、日本語母語話者は「次に」、中国語を母語とする日本語学習者は「それから」を最も多く使用し、それぞれ選択した接続表現は全く違うという傾向が見られた。

- 日本語母語話者の日本語の典型的な組み合わせ：「まず」→「次に」→「最後に」
- 中国語母語話者の日本語の典型的な組み合わせ：「まず」→「それから」→「最後に」

また、同じテーマについて中国語で書いた作文との比較分析を通して、中国語を母語とする日本語学習者の日本語作文に出てきた接続表現の選択の特徴は、学習者の母語である中国語の影響と密接な関係があることが示唆された。

- 中国語母語話者の中国語の典型的な組み合わせ「首先」→「然后」→「最后」

しかし、日本語学習者の作文に現われてきた序列の接続表現は正しく使用されているのか、また、序列の接続表現が使用されたことによって文章理解にどのような影響を与えるのか、読み手にとって読みやすいのか、それとも逆に分かりにくいのかについてはまだ分析をしていない。今後の課題としたい。

## 参考文献

- 石黒圭 (2005) 「序列を表す接続語と順序性の有無」『日本語教育』125、pp.47-56
- 市川孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 木戸光子 (1999) 「接続表現と列挙の文章構造の関係(1)」『文芸言語研究言語篇』36、pp.69-87、筑波大学文芸・言語学系
- 木戸光子 (2001) 「接続表現と列挙の文章構造の関係(2)」『文芸言語研究言語篇』40、pp.41-55、筑波大学文芸・言語学系

- 木戸光子 (2002) 「接続表現と列挙の文章構造の関係 (3)」『文芸言語研究言語篇』42、pp.51-62、  
筑波大学文芸・言語学系
- 小林典子 (1987) 「序列副詞—「最初に」「特に」「おもに」を中心に—」『国語学』151、pp.15-29
- 周平・陳小芬 (1993) 『新編日語』上海外語教育出版社
- 日本語記述文法研究会 (2009) 『現代日本語文法 7 談話；待遇表現』くろしお出版
- ひけひろし (1996) 「接続詞のはなし (2) —「それから」と「そして」—」『教育国語第2期』  
22、pp.15-26
- 飛田良文・浅田秀子 (1994) 『現代副詞用法辞典』東京堂出版
- 森重敏 (1959) 『日本文法通論』風間書房

(こう めいきょう 言語社会研究科博士課程)